

資本主義社会の生産

「最新の」著述家の小さな見本、ニコライーオン氏を引用しよう。彼は、その著書『概要』の242ページで、ロシアの製粉業における資本主義の発展について論じている。著者は、大規模な蒸気製粉工場の出現を指摘して、これらの工場は、改良された生産用具をもち（製粉工場の改造には、七〇年代から、約一億ルーブリが支出されている）、その労働の生産性は二倍以上に高まったと言っているが、しかし著者は、前記の現象をこう特徴づけている。「製粉業は発展しなかった。それは大規模な企業に集中されたにすぎない。」それから、この特徴づけをすべての産業部門におしひろめて（二四三ページ）、つぎのように結論する。「例外なくすべてのばあい、労働者大衆は仕事から解放されて、職を見いださない」（243ページ）、「資本主義的生産は、人民の消費を犠牲にして発展した」（241ページ）と。そこで、われわれは読者にたずねるが、このような所論が、いま引用したシスモンディの所論といくぶんでも異なっているだろうか？ この「最新の」著述家は、二つの事実、われわれがシスモンディの例でも見たところと同じことを確認しており、そして同じような感傷的な文句によって、これらの二つの事実から言をそらしているのである。第一に、彼の例は、資本主義の発展が、まさに生産手段にかんして行われることを物語っている。これは、資本主義が社会の生産力を発展させることを意味する。第二に、彼の例は、この発展が、資本主義に固有な矛盾という、まさにその特殊な道にそって行われることを物語っている。生産（一億ルーブリの支出は、非個人的消費によって実現される生産物にたいする国内市場である）は、それに照応する消費の発展なしに（人民の給養は悪化する）発展する。すなわち、まさに生産のための生産が行われるのである。

第二巻 経済学的ロマン主義の特徴づけによせて P143~144 1897年三月執筆

コメント

資本主義の発展は、生産手段の私的所有者が生産手段を増強するための「生産のための生産」によっておこなわれる。